

「光」の図像学—その宗教的シンボリズムについて

神原 正明

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2001年9月28日 受理)

キリスト教美術で「光」というテーマは重要だ。もちろんキリスト教に限らず、自然を描写する場合、光がなければ絵にもならないわけで、美術にとって今日までつねに光は重要なキーワードだったと言える。広い意味では「光」は宗教と芸術の共有財産だ。ことにキリスト教時代に光が重要視され、その伝統が尾を引いて現代に至っている。近代以降はほとんど宗教的なニュアンスはなくなってしまったわけだが、現代でもかつて神は光であったということを念頭において見ていくと、現代にまでもつながっている思考の系譜がある。おそらくそれがキリスト教に支えられた西洋文化の流れであり、基盤だろうと思う。写真術の発明ですら、そこに起因するような気もする。

光というのはどんなものであって、それを美術の世界でどんなふうに理解され、それがかたちに表わされていったかを、ここでは見ていきたい。

現代では光というものを、いろんな方法で科学的に分析している。光学という学問が起り、自然科学の目で、自然界を解き明かしていこうということになる。それでは現代、いったい光はどんな意味をもっているのだろうか。かつての光をめぐる思索は失われてしまったのだろうか。

光の意味

もともと自然界には意味などない。それに意味付けをするのが人間で、その意味付けによって、文化が生まれてくる。自然科学の名のもとで光を分析し、全く人間生活とは関係のないものとして客観的に見る立場もあるのだろうが、少なからず人間は光に影響されて、全身に光を受けて一生を終える。そうならば人間の思考や生活全般にわたって光が大きく作用しているはずである。

絵になった光は、写真も含めて結局は光の粒でしかない。光の粒が色彩として置かれている平面だが、それを私たちは見て光の粒とは思わないで、そこにかたちやイメージを思い浮かべてしまう。それが時代と民族と風土によって多様に変化する人間文化をかたちづくる。

おそらく赤ちゃんがこの世に生まれたときに見た世界は、光の洪水、光の粒であったはずだが、それがじょじょに成長する過程で、もののかたちがわかってきて意味をつけてい

く。

本来は何の意味もない光の粒が、この世の中に散らばっているというのが真実であり、それが出発点をなす。

ことばからスタートしてみると、英語の light は、「光」と「軽い」という意味がある。たいていの意味合いは元々の意味と、形容詞化された意味がある。光は意味合いとして軽いというニュアンスをもってイメージされていることがわかる。つまりそれは天上に向かう上昇のことだ。

ことばは如実にその意味を物語っているが、光の意味を知るには、光の科学・光の哲学・光の芸術という観点から見る必要がある。それぞれに立場によって受けとめ方が違うだろう。現代では光は科学の領域に入っていて、インターネットなどで検索してみると、すぐに出てくるのが光が音にかわる CD やレーザーディスクなどのメカニズムのことだ。工学というテクニカルなものとして、今は光を考えていこうというのが主流になっている。

しかし、光にどういう意味があるのかという、思考の対象として受け止めてきた歴史は、過去何千年にわたる。古代エジプトの頃でいうと、たぶん光は太陽だった。それは太陽神という神でもあり、たとえば突如として日食などが起こり世界が真っ暗闇になってしまふなどの自然現象に出会うと、今では月がその間に入ったのだということで説明がつくが、当時はそうは考えなかった。自然界の大きな力、神の力を想定してそれを意味付けていった。重要なのは正解ではなくて、どう考えたかである

そこに信仰というものも出てくる。光について考える「光の哲学」が成立する。それは神を考えることと大差なく、素朴な自然宗教に基づいている。光について考えてみるといろいろな不思議さに出会い、神秘に満ちたものだとわかる。

もちろん私たちは光があるからモノが見えているが、光がなくなればモノがなくなるのかというとそうではなくて、光はなくてもモノはある。触れれば確かめられるのだ。光はモノの存在とは直接関係しないで、存在するのだということも見えてくる。

先に「光の粒」といったが、光は物質であるかないかという論議が古くからあった。今でも物理学の領域で、光は粒子か波動かということで議論が分かれるようだ。ガラスは触れられるので物質だが、光が物質だとすると、これがガラスを透過してしまうということはどういうことか。厳密に言えば80%が透過し、残りの20%は反射する。

あたり前の話ではあるが、中世の人たちにはこれが不思議に見えた。なぜ光がガラス窓を通過するときに、ガラスを割らないのかということだ。どんな小さな石でもガラスを通過することはできない。通過したときには必ずガラスは割れている。この光の奇蹟を、彼らは神という存在におきかえて考えた。

光の神学

そこから光の神学、神は光であるという、神の超越性に話をつなげていく。そして聖母マリアの処女懐胎という話とそれを結びつける。聖母マリアがヴァージニティを失わないままキリストを身ごもったことと、光がガラス窓を破らないで通過してしまうこととを同一視していく。光が差ってきてマリアの胎内でキリストは育てられていく。その置き換えとしてゴシックのキリスト教会、大聖堂というシステムを、マリアのおなかを拡大した形でつくりあげていく。

ゴシックの教会堂の中に入ったときの体験もこれに由来する。ステンドグラスにおおわれたなかを光が入ってきて、堂内は一種独特の雰囲気包まれる。あの中では私たちは光そのものを見ているわけではない。光がなければ見えない世界だが、全体が色の洪水というなかで、この世とは思えない世界を体験する。体全体で光を感じ取るというふうな受けとめ方である。それは恐らくキリストがマリアの胎内で守られている雰囲気をつくりだしてのことだろう。

単にキリスト教会に行って天井の高さ、広い空間に感動するのとともに、目を閉じても感じ取れるものというのが、中世ゴシックをつくった人々の思いだったはずだ。

大規模な光をいかにかたちにするかというときに、一挙にゴシック建築建設には至らない。それには千年以上の中世の長い経過が必要だった。最終的な結晶としてステンドグラスが現われた。そこでは確かにガラスは、光の結晶である。

似たような構造、天に向かってそびえたつというのは、宗教の時代が過ぎても続く。たとえばアメリカの繁栄は、ニューヨークの摩天楼に天に突き刺さるようなビルを建てた。その高層ビルはかつてのステンドグラスと同じようにガラスでおおいつくされる。現代のカテドラルの建設に他ならない。違うのは、かつては都市のシンボルとしての唯一の搭であったが、今はまるで棒グラフのように、それぞれが高さを競い合っているという点だ。

ゴシックの建築であまりにも広い内部空間に入ると、天井が落ちてくるかもしれないという危機感が常にあったようだ。石の大きなものだから急に天井が落ちて来たりはしないと思うが、計算上ぎりぎりのところでかろうじてバランスを保っているものもある。大規模な教会堂でごく初期のものでは、天井が落ちたという話は知られる。

危険なところと抱き合わせにある恍惚感に、私たちは浸っているのだ。逆に危険なところでなければそうした恍惚感は生まれてはこない。マリアの胎内はキリストが守られている安全地帯だが、キリストはつまりは人類の罪を背負って死ぬ運命にあるわけで、常に危機感をもったものとしてイメージされ、一時的に守られているに過ぎないということだ。

摩天楼のガラス張りの高層建築を見ていると、地震が起これば、とたんにガラスは砕けて槍のように地表に落ちてくるという恐怖を感じる。先がとがったものが突き刺さる恐れを抱きながら生活しているということだ。宗教がなくなって以降も、ゴシック建築のシステムは、枠組として人間文化の中に息づいている。高層ビルの崩壊はアメリカとキリスト

教文明の破滅を意味した。

現代の鉄とガラスとコンクリートという建築の基本的な組み合わせを考えるなかで、キリスト教の神の問題も見え隠れしてくる。

光について語った神学者のことがばがある。もちろん聖書には出発点として「はじめに光があった」という記述がある。神が最初にした仕事は、光をつくったことだ。「光あれ」という掛け声とともに天地創造が始まる。光があるということがその後の六日間の天地創造の前提となる。

神学者の言う光の解釈を幾つか拾ってみる。四世紀に聖アンブロシウスは『精霊について』という文章の中で「父なる神は光であり、御子は光であり、精霊は光である」という。三位一体はすべて光であるというのだ。聖母マリアの処女懐胎のことについては、一二世紀に聖ベルナルが次のように語っている。

「太陽の光がガラスを壊すことなく透過し、緻密な堅牢さを入るときには穴を穿たず、出るときにはそれを破ることなく透過する如くに、神のことが、父の光は聖処女の胎内に透き入り、そして無原罪のまま胎内より出でたまう」。

聖母マリアの「無原罪の宿り」はキリスト教図像学の重要なテーマでもあるが、それを光の神秘と抱き合わせて考えることになる。光は魔力、あるパワーを秘めたものだということがわかる。それはキリスト教の神学者だけではなくもっと古代のエジプトやメソポタミアから思いつかれていることだ。

光のパワー

光のパワーとはどんなものだろうか。日常生活を送っていると、光というのは空気と同じで、すでにあるもので、なくなりはじめてそのありがたみがわかるという親のような存在であることに気づく。震災があって水が大事だというのがわかったというのと同じで、光はなくなれば不便どころではなくて、この世はすぐに滅びてしまう。それは人が目をつむった状態のことだというだけではすまされない。

単にあるものではなくてパワーをもってあるもの、それによって私たちは生かされているのだという考えかたが必要になってくる。たとえば日常生活で朝になって目がさめて起きる。なぜ朝になって目がさめて、起きるのかを問ってみる。明るくなると何となくからだが起きてしまうというのが、一般的な答えだろう。しかし実はそれは光が、目をつむっていたとしても、体中にあたっていて起きろと言っているということでもある。

光には人間をめざめさせるパワーがあるということが、日常生活の中で見えてくる。逆にいうと真っ暗になると眠るしかない。目を閉じているといつのまにか眠ってしまっている。しかし目を閉じていても昼のひなかではなかなか眠りにくい。それはたぶん体全体で光を感じているからだろう。

やはり闇の中で眠る理由は、光のもっているパワーが、人間をめざめさせるという原理

と連動している。光は人間を活動させる。光が人間を目覚めさせて、身体を動くように仕向けているということだと考えると、肉体労働者が雨が降れば仕事がなくなってしまうということをも意味付ける。日雇い労働者を殺すのに刃物はいらぬ。雨の三日も降ればいいという。雨の中でも突貫工事はできるが、光が彼らにパワーを与えないということだ。

そんな風に考えると、体内のエネルギーはすべて太陽からもらったものであることに気づく。実際には人間は太陽の光がなくても生きてゆけそうに思うが、日のあたらないところで何日も閉じ込められると、多少の差はあれとたんに精神的に落ち込んでくる。

植物は太陽の光を受けて、光合成という名のもとで、光を養分にして生きている。文字のかたちを見ても、「光」は「米」に似ている。太陽の光がそのまま食物となる。それを動物ないしは人間が食べる。間接的に人間は光を食べているということだ。光のエネルギーは直接には人間の食べ物とはならないが、それを丸ごと吸収した植物を、間接的にあるいは直接的に口にする。

最近では光の医学ということがずいぶん言われてきている。光そのものに人を癒し治療する力があるというものだ。アメリカなどで治療方法が開拓されてきている。光にあたることによって今まで思いもつかなかったような病気が治ってしまうということだ。光には人間の目に見える光と、見えない光がある。可視光線とそうではない赤外線、紫外線を区別する。紫外線などは身体に悪影響を与えるということも言われるが、光の治療の現場ではトータルな光の方がいいのだとされる。薬はいつも毒にもなる。

光の不思議

光は人間にとって欠かせない。ところが非常に不思議だと思える例がいくつかある。もちろん光は直接は見えない。光を見たいと思って太陽を何秒も見ていると目は焼け爛れる。

光はモノにあたってそれが反射して、私たちの目に入ってきて見えるのだというのが、光学的な考えだ。しかし中世の人たちはそうは考えなかった。光はパワーでありエネルギーなのだから、それぞれの物質にいくぶんか混じり込んでいるとも考えられる。

たとえば宝石など自分で輝くものがある。ホタルも自分で輝く。自分自身で輝くものとして宝石を重要視する。ルビーやダイヤモンドなどがなぜ珍重されてきたかという点、光というものがその石の中に生め込まれているのだと考えたからだ。光があたって反射して人間の目に入るとは考えないのだ。

人間も同じく光を目から発すると考えられた。見た者を石化させるメドゥーサ伝説はそこから生まれてきたものだ。光はパワーがあるから、そのパワーをたくさん宿している宝石が重要なのだということになる。

この理屈が中世のステンドグラスの中に息づいている。ガラス窓というのは現代の高層ビルでは透明だが、ゴシック建築ではそれに色をつけて、ブルーと赤を基調としたものに

分ける。ゴシック建築が生まれた要因を考えてみる。もともとはロマネスク建築があった。それは光が入り込まない牢獄のような雰囲気をもっていた。しかし石造りでありその中に入れば落ちつける空間でもあった。それがゴシック建築になると、何とか薄暗い堂内に光を取り込みたいというところから思いつかれたのがガラス窓にするということだった。

そこで光を取り込むことになるが、ふつう考えるとステンドグラスのように色のついたガラスよりも透明の方がたくさん光が入ってくるはずで、そうすればいいものをわざわざ色をつけた。現在ゴシック建築で当時のままのステンドグラスをもつものは少ない。当時の状態で鑑賞するのは不可能になってきている。現代ではガラスをつくるテクニックから言っても、半透明なものから透明なものに進化している。

現存するゴシック建築に入るとずいぶん明るい印象を受けるが、実際には中世ではそんなに明るいものではなかった。シャルトル大聖堂は当時のステンドグラスが残るが、そこに入るとガラス自体の総面積が二千平米あると言うのだが、その割には意外と暗い。あれを全面透明のガラスにしていればもっと明るくできたはずだ。明るさをめざしていたキリスト教にふさわしいものができたにもかかわらず色をつけている。

それは宝石と同じように、色のついたガラスが光を通過させるだけではなくて、ステンドグラスそのものが光を発しているという点が重要だった。宝石が輝くのも同じように、発光するものと見なした。それはかつては壁だった。その壁がガラスに変わるのだ。ふつうは窓と思いがちだが、ステンドグラスは実際はガラス窓ではない。開かないので窓ではなく壁だ。そこにあるのは今まで分厚い石の壁であったものが、ガラスに変わったけれども同じように壁であり、ただ違うのは光を発する壁であるという点だ。

キリスト教の教会そのものが、光というものでおおわれていると見なされる。実際には自分から光り出すとは考えられない。宝石が光るといっても真っ暗闇では光らない。(もちろんこれは憶測で、みずからの力で光るものを宝石と定義したのかもしれないのだが)。太陽だけではなく何か別の光源があって、それが輝くのだが、人工光線というものが生まれてきて話は複雑になった。一九世紀人工光線が闇を征したが、それは光(=神)への冒瀆でもあった。

光は何かモノにあたってそれが目に映る。光は何者かというときには、なかなか光そのものが見えないのでどうしようかと思案する。絵画は見えないものを見えるようにするというのが目的だったなら、見えない光をいかに見えるようにするかというのが絵画の歴史だった。

光はモノにあたらないと見えないというのは、不思議といえば不思議、当たり前といえはあたりのことだ。真夜中に懐中電灯を持って外に出て、光を放つ。懐中電灯は光をあてたところが明るく見えるものだが、空に向かって照らすと何にもあたらない。そこから光はモノにあたってはじめて目に付くものだという事に気づく。しかし実際にはレー

ザー光線のように強い光は目に見える。サーチライトがむなしく夜空をさまよい、闇に消え入る姿はくっきりと映し出される。

「光」のモチーフ

モノにあたったとき光は反射して目に入る。同時に、あたらない部分に「影」を落とす。そこから影を通じて光を見せるというプレゼンテーションがはじまる。これは絵画の歴史でいうと、バロックという一七世紀の時代に影を強調することによって光を表現したことと対応する。

実際に絵を描く場合に影は邪魔なものである。しかし、影があることで本体が浮き上がって見える。影は実体を見せるのに欠かせないものとなる。ここにあるのは光を見るには何かモノに当てないといけないというのと同じ原理だ。モノは光がなければ見えないし、光もモノがなければ見えない。

光と抱き合わせにいろんなモチーフが登場する。「影」もそのひとつだろうし、人間の「目」もそうだ。光と同じように目のシンボリズムがある。人間の目は光を感知する機能がある。実際には光を感知してそれを意味に置きかえるのは、脳の仕事なのだろうが、目は最先端にある感覚器官、いわばレンズということだ。

カメラや顕微鏡、望遠鏡が出てくる背景には目の構造というのが基本にあって、それを器械に置き換えて光学的な装置が生み出されてきた。その目的には光の神秘を探りたかったというふうにも見える。目を考えるとき光は欠かせない。目はどんなものかという問いにシェイクスピアのことは「目はこころの窓」というのがある。目を見ればその人の考えていること、深層の隠されていることが見えてくる。目に力があるというのは背景には光にパワーがあるということと置きかえられるものだろう。レンズはガラスの特殊なかたちだが、それが発見、発明される背景には人間の目が、透明で光を通過させるものとして考えられたからにちがいない。

シェイクスピアだけではなくて、聖書の中でもルカの福音書にこんなことばがある。「あなたのからだのともし火は目である。目が澄んでいればあなたの全身は明るい、濁っていればからだも暗い」。目がその人の心のありようを見分ける決定的なものになるというわけだ。

目は開かれた窓ということになるが、実際に日常生活で目について考えたときに、不思議だと思うことがいくつもある。たとえば赤ちゃんを見ていると、こちらの目をしっかり見ているのに気づく。赤ちゃんが目が合うのだ。生まれたての赤ん坊が何に視線を合わせているかという話になる。人間は頭のでっぺんから足の先まであるのだから、どこでも見てよさそうなものなのに、赤ん坊はしっかりと私たちの目を見ている。それはなぜなのか。とても不思議に思う。

赤ちゃんが目があうと何とはなしに気恥ずかしい思いにかられることもある。純真無垢

なすんだ目に大人の濁った心が見透かされているような気がする。目というのは光と同じように何らかのパワーをもっているとしか思えない。赤ちゃんも目を見るし、私たちも赤ちゃんの目を見る。全体をながめればいいものだけでも、自然と目と目があってしまう限りは、光のパワーと似たような視線の魔力を想定しないと説明がつかない。

確かに「視線を感じる」と言うとき、視線にはエネルギーがある。それは視力のことでないが、それと連動はしている。鋭い視力とは裏側までも見抜いてしまう力のことだ。0.1しか視力のないものにとっては1.5も見える人間は驚異的だし、さらにいえばもっと視力が増せば、裏側まで見通してしまう者がいても不思議ではない。

日常生活の中でも光があつて、それを不思議だと思ひさえすれば、そこから信仰や哲学が生まれてくるのだろうという気がする。人間の目の構造についていえば、それはただのガラスではなくていわば凸面鏡だ。それが世界を写す鏡として表現される。目がひとつのモチーフになるのと同じように、時期同じくして「鏡」が描かれる。鏡の中でも凸面鏡がことさら描かれる。

鏡なら四角いものでよさそうなのに、一五・六世紀の絵の中で盛んに凸面鏡が登場し、そこに映し出された画像は、当然周辺がゆがんでいる。人間の目はそれと同じくゆがんでいる。しかし人間の場合、中心部分にしか焦点があたらないので、周辺はよくは見えていない。実際に目に「見える通り」に描けといわれれば、四角い画面で描けるわけはなく、円形か、あるいは目が二つあるので楕円形の絵になる。実はゆがんでいたのは凸面鏡のほうではなくて、四角い絵のほうだった。

それはちょうど地球がどんな格好をしているかというときに、地図をつくった最初の人々が、同じようなことを考えてか楕円形にしていることと連動する。本来なら目の構造に合わせれば地球はまるいので、地図もまるくなるはずだ。地球がまるいのと目がまるいのと似たような構造かとも思う。確かに古来、鏡はまるいほうが多い。地球を四角に置きかえると、周辺部分はゆがむ。北極と南極は一点のはずなのに線になってしまう。四角の中で図式化するのが人間にはわかりやすいということか。

鏡はゆがむのだけれども、凸面鏡を絵の中で置いているということは、実際に中世からルネサンスの日常生活の中で凸面鏡が壁にかかっていたということでもある。しかしそれは日常生活でただぶら下がっている鏡ではなくて、人間の目を置き換えたもの、つまり世界を写し出すものと考えられたという方がわかりやすい。同じ頃イタリアで「トンド」という世界を写す円形の絵画も登場する。

このようにガラス・影・目・鏡など、光から引きずり出されてくるモチーフがある。これらは目に見えるものだ。光自身は目に見えないが、これを目に見えるかたちで何とか物質化・絵画化していったという流れである。光が問題になってそれをいかにモチーフとして絵に表わすか、絵でも十分に表わしきれないというところからカメラ・写真術が出てくる。方向としては光を追及してきた歴史と理解することができる。かつては光に課されて

いた神学的な意味は、どんどん奪われてしまったけれども、現代でもまだそれを引きずりながら、今も生活をしているのだという気がする。

古代の光

具体的な作品を見ながら光の考察をさらに進めておきたい。古代においては目がパワーをもっていた。メソポタミアやエジプトの彫刻を見ると目が、アイシャドウで縁取られている。目にパワーがあるというのが一目瞭然としてわかる仕掛けだ。アイシャドウということばをつかうと現代的な響きがあるが、パワーとしての目が現代社会の中で魅力を引き出すものとして強調されているということだ。古代の古いものが現代にのみがえったのだろうと思う。

エジプトのものでルーヴル美術館にある有名な書記坐像は、動きのないものだが、よく見ると目には水晶が埋め込まれている。目のパワーを強調し、同じくアイシャドウで縁取っている。この目は単なる肉体の一部の再現を越えて、エジプト文化の重要な特性を物語っているようだ。この目が見ているものは「永遠」である。この永遠を見つめる目は、ナイル川が永遠に流れるように、永遠なるものをあこがれていた文明の象徴となっている。人間は肉体が減びても永遠に生き続ける。ミイラにして持続させるのも永遠を願うということだ。書記坐像の埋め込まれた目も、何を見ているのでもなくて、前に立つ我々を通り越して、その向こうにある永遠に目が向いているということだ。

こういうものは現代人がガラス玉を埋め込んで、同じようにしてもこうはならないで、もっと近視眼的な視野に収まるに違いない。エジプトの死生観、世界観がこの目に象徴される。

ところがギリシャ時代になると目は強調されなくなってしまう。そこがおもしろいところで、古代エジプトやメソポタミアにおいて、目と光がすべての中心であったのとは逆に、ギリシャ世界の中では、目よりももっと大事なものに気づく。目は人間の単なる肉体の一部にすぎないのだという見方が出てくるようだ。

ギリシャ彫刻を見ていると、確かに目を埋め込んだものもあるが、全体的には目はくぼんでしまっていて、大理石の彫刻ではそこは陥没して、黒く影を落としてしか見えない。見る側は目を見つめるわけにはいかない。顔やからだの全体に目が移動する。それはやっとな目のパワーから開放されたということだ。もっと普遍的なものを見る見方が、ギリシャ時代に成立してきたということだ。

ギリシャ時代の彫刻は今では首だけ出土されてはいても、たいていは全身像としてある。人間というのは目や顔だけではなくて、からだ全体がそれぞれに意味があるというメッセージを、ギリシャ文化は伝えようとした。それはいわゆるヒューマニズムということでもある。

民主主義がギリシャに誕生したというのは、何を意味するのか。今まで目というのは台

風の日でも、権力の日でも中心部分だけが生き残ればいいというものだった。ギリシャはそうではないですよ、からだ全体、手も足も目もすべてが同じだけ意味があるのだと言ったのけた。目はむしろない方が全体としては見えてくる。ギリシャのデモクラシーの考えかたは、このように彫刻を見る場合にもあてはまるものだ。

ローマ時代になると、光を象徴的に語ったものにパンテオンがある。これは神殿、お墓、一種の記念碑だが、とにかくギリシャの神殿をベースにしながら、それをローマ式につくりかえた。ドームになった非常に広い内部空間だ。かつては石を組んでアーチをつくったが、ここではコンクリート技法が発明されて、内部空間は柱を立てなくても広がりのあるものを実現できた。

そのとき光を取り込むすべとして、パンテオンは天井部分に穴をあけた。これはきわめて大胆な発想で、建築が建築でなくなる。建築は雨が降り込まないようにするのが最小限の定義だったが、それを見事にくつがえして、開口部をすっぽりまるく抜いてしまった。それによって光が入り込むが、まだガラスを埋め込むまでには至っていない。光が直接堂内に入ってきて非常に明るい。これはローマ時代の技術力の成果だ。それをここで証明して見せた。

パンテオンの構造は、まさに目をかたちづくっている。光を映し出す地面というのは、人間の網膜にあたる。ギリシャ時代に否定された目が、古代ローマによって再現されてくる。ローマはギリシャのデモクラシーを引継ぎはしなかった。いわゆる皇帝権力の名のもとに、光が神に置き換えられるのと同じように、目が復活してくるのだ。エジプトでも太陽神ファラオは神であると同時に支配者だった。

中世の光

こうしたドーム構造をベースにして中世にキリスト教世界が打ち立てられていく。パンテオンのような天井の抜けた建築は、その後は天文台の出現まで出てこなかった。天文台も構造そのものは、目のかたちを基本にしている。それは宇宙に開かれた目である。

キリスト教中世では様式はいくつかに分かれるが、ビザンチンでの光の扱いはモザイクに代表される。イタリアではラヴェンナにあるサン・ヴィターレなどが知られるが、堂内は薄暗い。モザイクとその後のステンドグラスは光をいかに見せるかというシステムだ。壁面に絵を描けばよいところをモザイクにする。絵を描く方が簡単なのに、あえて小さなガラスの断片を壁に埋め込む。

遠くから見ると絵に見えるが、近づいてみると小さな破片を埋め込んだタイル模様ということになる。しかも風呂屋のタイルのようにきっちりとした整形ではなくて、乱雑な矩形であって、表面も平らではなくていびつに置かれ、それぞれの粒はあちこちを向いている。壁面に光沢のあるガラス質のものを埋め込むことによって、何を伝えようとしたのか。画集では絵として見てしまうが、実際にはこれを埋め込んで絵のように見せるという

のはたいへんな作業なわけで、コストもかかるし思うようにのびのびとした線は描けない。

モザイクというのは光が入ってきて粒のひとつずつにあたる。あたった光はアトランダムに反射する。その反射はいわゆる乱反射であって、堂内を移動するなかで、あちこちからチカチカと光が目に入ってくるというしくみだ。そこでは絵の図柄ではなくて光そのものを見ているのである。いわばミラーボールのようなものと考えればよい。

現代ではイメージの方を優先して見せるシステムができあがっていて、照明を施して画集でも、現地での鑑賞でも写真うつりのよいものをねらっている。つまり本来のねらいであった反射を嫌うのだ。それによって光の神秘性は遠のいてしまったようにも見える。

イスタンブールにあるハギア・ソフィアは、今ではイスラム教のモスクにかえられたが、ビザンチン建築の代表作だ。内部の壁画はつぶされているが、ドームの構造を見ると光の効果に苦慮したあとがうかがえる。ステンドグラスの色のついたガラスではなくて透明光が高いところから堂内に入り込んでくる。上からの光と側面の光とが堂内で交錯する。その独特の光の入り乱れたハーモニーがねらいどころとしてあったのだろう。それは確かに光の交響楽である。

そこでは確かに光は目に見える。窓を大きく取ればもっと明るい光になるのだろうが、狭い窓から入る光であればこそ、くっきりと光の道すじが目映る。工学的な面からもぎりぎりの設計だったようで、一度は天井が落ちてしまったという記録も残される。内部空間は広げたいけれども、これ以上窓を大きくは取れないというぎりぎりのところで支えているというような、あぶなかしいものとして目に映る。

アーヘンのシャルルマーニュの礼拝堂も同じ効果がねらわれたものだ。壁面は金地でおおわれ、狭い窓から光があたることでそれを見せようとする。金は何色だろうか。中世では絵はバックに金地を置く。金地がなくなってやがてそこに風景が描かれることになる。金地は光の言い替えであった。中世では光の描きようがないので金色にしてしまった。これはキリスト教だけではなくて仏教でも同じだ。

結　　び

ところが中世からルネサンスに移行する中で、光は金色ではなくて白色だという考えに変わってくる。太陽は何色だろう。ゴッホでは黄色だ。高村光太郎は緑色の太陽という文章を書いた。光が目に見えないという限りは、実際には太陽光線は透明でなければならない。透明とは色がいないことだが、それをプリズムにかけると七色に分かれる。それがすべて合わさると透明になる。透明は何色かというすべての色が入り込んでいる色だということになる。光は目に見えないがプリズムを通して色に還元することによって目に入ってくる。実際は可視光線のほかに、赤外線・紫外線という目に見えない光もある。

アーヘンでは金地の壁に光をあてる。これはロマネスク以前のキリスト教建築の基本形

だ。小さな窓からは、絞り込まれたカメラの目のように、光が直進する。光は直線として目に見える。光が目に見えるがこのときは光は白色に見える。厳密には光が見えているわけではなくて、空気中のチリにあたってそれが反射しているということではある。

以上見てきたように、光のシンボリズムはキリスト教中世の美術作品と宗教観を通じて、ほぼ完成されたように思える。ルネサンス以降、バロックから印象派、さらには写真から映像の時代での光の探求も、この延長線上にあって、西洋文化の思想的基盤を築くものとなっていくた。

主な参考文献

- バシュラール『蠟燭の焰』洪沢孝輔訳 現代思潮社 1969。
- ルイ・グロデッキ『ロマネスクのステンドグラス』黒江光彦訳 岩波書店 1987。
- ユルギス・バルトルシャイティス『鏡—科学的伝説についての試論、啓示・SF・まやかし』著作集4 谷川渥訳 国書刊行会 1994。
- ハンス・ゼーデルマイヤ『大聖堂の生成』前川・黒岩訳 中央公論美術出版 1995。
- 高木秀男『光の探究史』科学堂 1995。
- ジェイコブ・リバーマン『光の医学—光と色もたらす癒しのメカニズム』飯村大助訳 日本教文社 1996。
- ヴォルフガング・シヴェルプシュ『光と影のドラマトウルギー—20世紀における電気照明の登場』小川さくえ訳 法政大学出版局 1997。
- ニュートン「光学」(ゲーテ『色彩論(完訳版)』第1巻 高橋・前田訳 所収) 工作舎 1999。
- 小林康夫他編『「光」の解説』(宗教への問い2) 岩波書店 2000。
- リチャード・グレゴリー『鏡という謎』鳥居修晃他訳 新曜社 2001。
- リチャード・グレゴリー『脳と視覚』近藤倫明他訳 ブレーン出版 2001。
- W. Schöne, *Über das Licht in der Malerei*, Berlin 1954.
- M. Meiss, *Light as Form and Symbol in some Fifteenth-century Paintings*, in *Painter's Choice*, New York 1976.
- C. Gottlieb, *The window in art: from the window of God, to the vanity of man: a survey of window symbolism in western painting*, New York 1981.
- J. Bialostocki, *The Eye and the Window: Realism and Symbolism of Light*, in *The Message of Images*, Vienna 1988.
- P. Reuterswärd, *Windows of Divine Light*, in *The Visible and Invisible in Art*, Vienna 1991.
- V. I. Stoichita, *A Short History of the Shadow (Essays in Art and Culture)*, Reaktion 1997.

Iconography of the “Light” as a Religious Symbol

Masaaki KAMBARA

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 28, 2001)

Regarding the christianity fine arts, light is an important theme. That is the common property of religion and art. This genealogy of thought continues from ancient times to the present age. The mankind has thought the light as an object of thinking past thousands of years. The medieval people wondered why light passed without breaking the glass window. They connected this with the fact that the Virgin conceived Christ immaculately. The stained glass was born from this concept. For the medieval cathedral it is important not to see but to feel. The same is said of the case of today's skyscraper. Ecstasy is produced just because it is dangerous. The problem of God in Christianity is reflected also in the contemporary building made with glass, iron and concrete.

Light makes the human awake. The energy in the human body is received from the sun which is root of all lights. We eat the sunlight indirectly by the fact that the plant is eaten. The medieval person thought the jewel shone with own power. The jewel has light inside. Also the stained glass is the wall which gives out light. Each one of the glass, the shadow, the eye and the mirror is the motif of light. It visualizes light, though light is not visible with itself.

In ancient Egypt the eye is edged with the eye shadow. But when it becomes Greece, the eye stops being emphasized. The eye is no more than a mere portion of the human body. With the Greek democracy, not only the eye but also every section of the body had just the same important meaning. The eye revives in the Roman era. The Pantheon is such a symbol. With the observatory of modern times, that revives again. In Middle Ages light was gold, but in Renaissance it became white. Symbolism of light was completed by the medieval fine arts.